

1. 樽前山直轄火山砂防事業の概要①

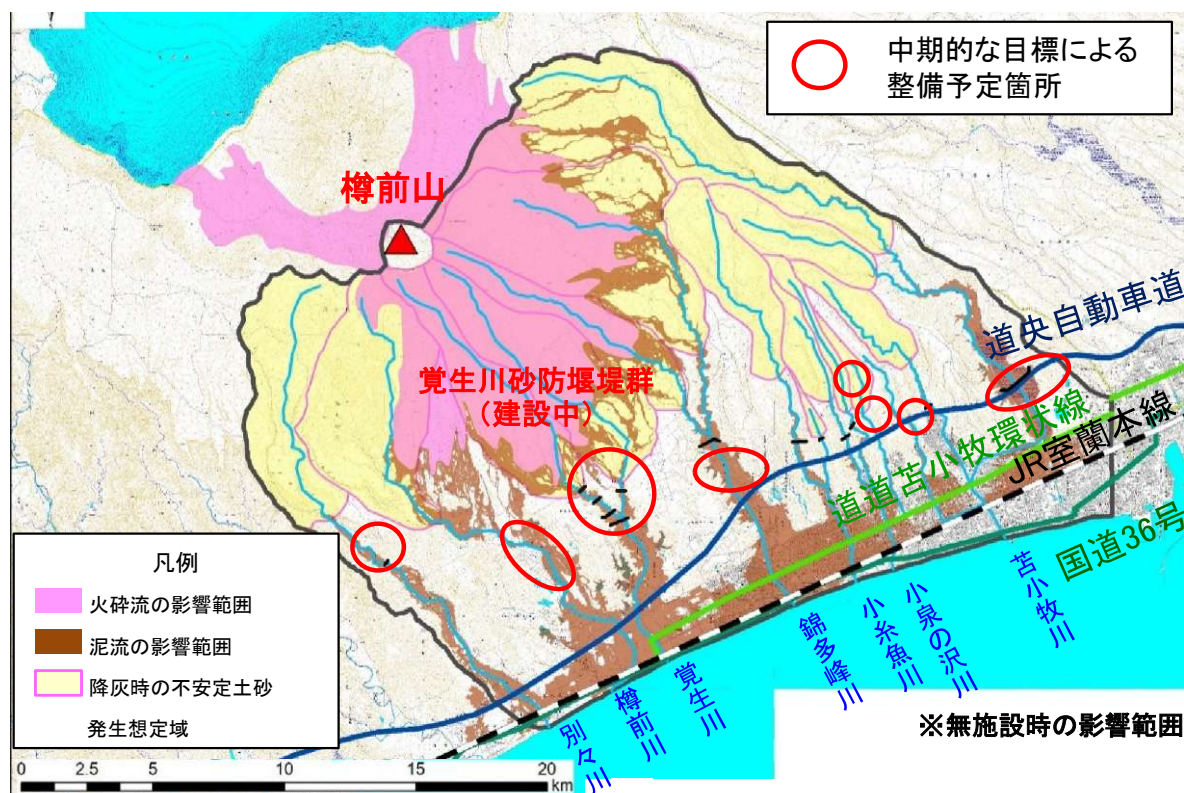
- ・樽前山では、火山噴火に伴う泥流の氾濫を抑制し火山泥流災害の軽減を目的として平成6年度より樽前山直轄火山砂防事業に着手しています。
- ・大規模噴火に伴い発生する火山泥流の規模が大きく、完成までに長期間を要するため、保全対象に対する効果を総合的に勘案し、中期的な目標を設定して、整備を実施しています。

目標1: 降雨型火山泥流に対する被害の軽減

火山噴火に伴う降灰は広範囲にわたるため、降雨型火山泥流対策を完了し、被害の軽減を図ります。

目標2: 融雪型火山泥流に対する被害の軽減

融雪型火山泥流に対して、被害の軽減を図ります。



中期的な目標達成後の整備率

目標1

中期的な目標達成後の
整備済土砂量 : 2,974千 m^3
(100%)

目標2

中期的な目標達成後の
整備済土砂量 : 15,290千 m^3
(48%)

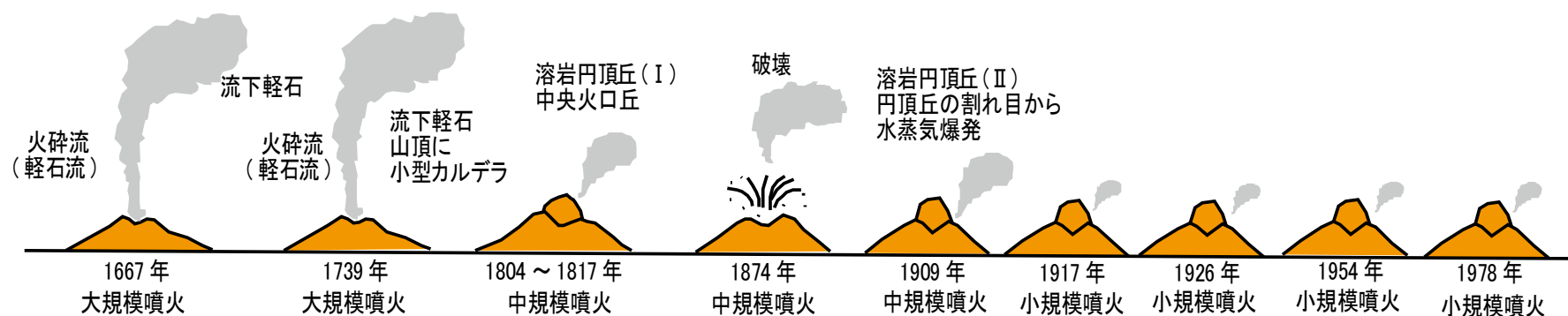
残りの整備対象土砂量 :
16,850千 m^3
(52%)

降雨型火山泥流

融雪型火山泥流

1. 樽前山直轄火山砂防事業の概要②

- ・樽前山は1667年から1978年までに大～小規模の噴火を繰り返し、1667年および1739年の大噴火では火砕流が流下して森林の焼失や家屋の埋没、多くの死傷者が発生したと伝えられています。
- ・近年においても小規模の噴火を繰り返しており、昭和53年(1978)のごく小規模の噴火後も火口原の温度上昇、地震群発や微量の降灰があり火口の高温状態が継続中。
- ・樽前山直轄火山砂防事業では、1739年噴火と同規模(総噴出量:10億m³、過去200年程度で最大規模の噴火)を計画の規模としています。



活動時期	規模	噴火の概要
1917年	小噴火	降灰、ドームに亀裂。鳴動、噴煙爆発音等あり。ドーム上に3個の火口形成。
1926年	小噴火	鳴動、爆発音、噴煙、降灰。ドームに亀裂。
1954年	小噴火	爆発音、降灰、小泥流(火口付近)、地震(苫小牧で震度2)、爆発音、空振。
1978年～81年	小噴火	降灰、その後ごく小規模な噴火を繰り返す。
1996年	噴気活発	ドーム南東亀裂で噴気活動活発化。有感地震(支笏湖畔・丸駒温泉等で震度2)。
1999年	噴気活発 地震群発	ドーム南西火口から噴気。火口温度上昇。火山性地震が群発。
2003年	噴気活発 地震群発	ドーム南西噴気孔群の最高温度約500℃。溶融硫黄、硫黄の燃焼、砂状の噴出物確認。火山性地震が群発。

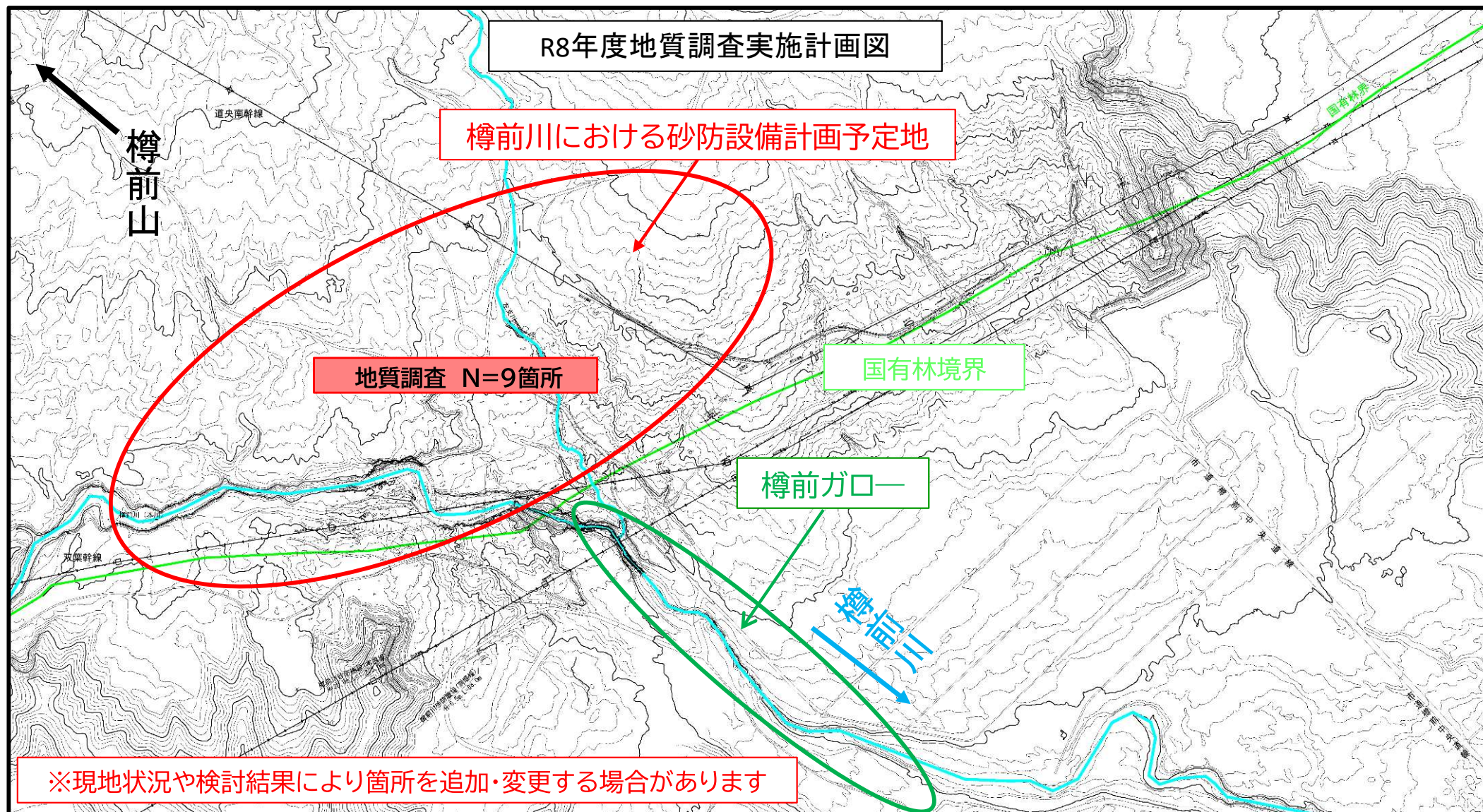
3. 事業の進捗状況と今後見込み

- ・これまで覚生川、錦多峰川、苦小牧川、小泉の沢川、小糸魚川において砂防設備を整備してきました。
- ・現在は、覚生川における覚生川砂防堰堤群の建設を進めており、熊の沢川1号砂防堰堤及び熊の沢川3号砂防堰堤を工事を行っております。
- ・樽前川については、砂防設備が未整備となっており、今後の整備に向けて、現地調査、設計を進めていきます。



4. 樽前川における計画と地質調査について①

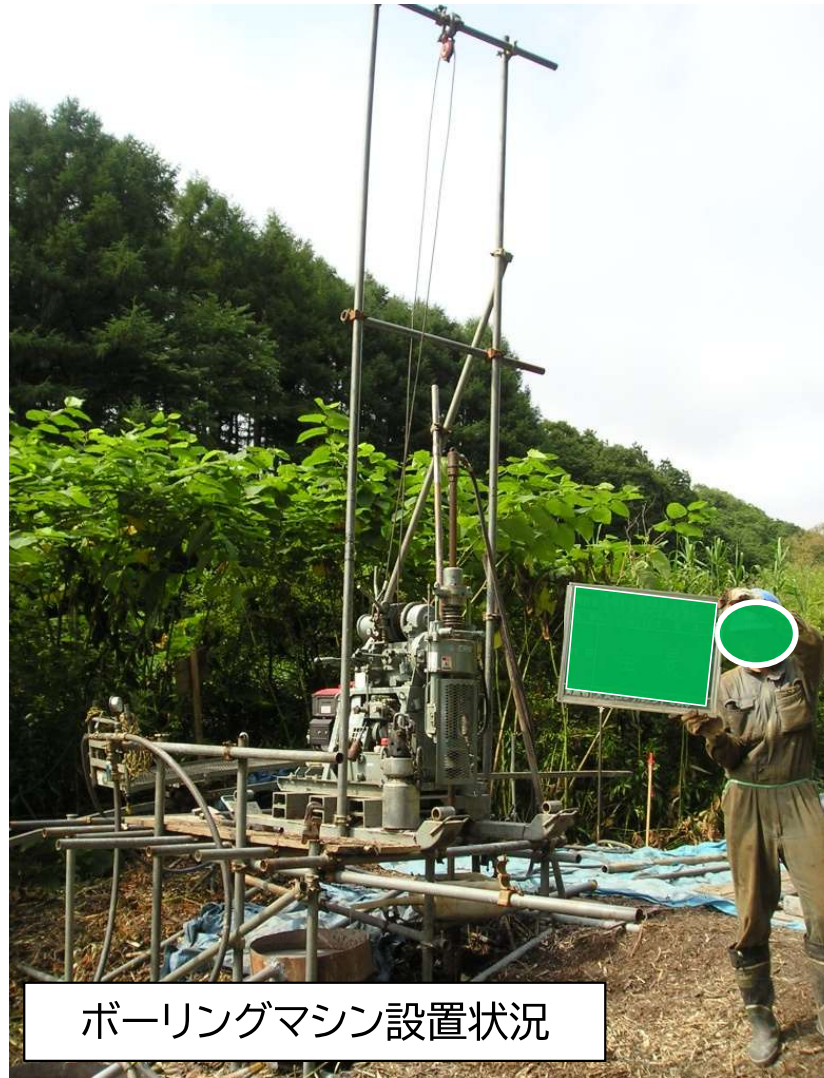
- ・樽前川において砂防設備の設置を計画しており、R8年度に砂防設備計画予定地において、設備設計のために必要な地質調査(ボーリング調査)を合計9箇所実施予定です。
(※いずれも自然環境保全地区(樽前ガロー)の範囲外で実施)
- ・R8年度以降についても、必要に応じて地質調査や測量調査等の現地調査を実施していきます。



5. 樽前川における計画と地質調査について②

- ・地質調査については、調査箇所において足場を設置し、ボーリングマシンを使用して、直径6.6cmのボーリング孔を地下7～16m程度の深さで削孔し、現地の地盤を調査します。調査完了後、ボーリング孔は埋戻します。

他現場における作業事例



ボーリングマシン設置状況